

秋田遠景近景

日銀秋田支店長「ラム

本県の多くの関係者が協力し、熱い視線を浴びている実写映画「ルックバック」を、秋田市内の映画館で鑑賞する機会に恵まれた。にかほ市が主な撮影地となり、撮影期間も長期にわたったことから、本紙をはじめさまざまなメディアですでに作品の魅力や撮影中のエピソードが紹介されていることは、読者もご存じの通りだ。ここでは、外からの視点を通じて見えてくる本県の魅力という観点から論じてみたい。

個人的な話になるが、私が初めては枝裕和監督の作品に触れたのは、東京・渋谷のミニシアターで見たデビュー作「幻の光」だった。宮本輝さんの小説を原作に、夫を突然の自死で失った妻が答えのない問いに苦しむながらも、次第に再生への道を歩む物語だ。主演俳優がひとりたらずシーンは今でも鮮明に覚

えている。

その後も、実際の育児放棄事件を下敷きにした「誰も知らない」、乳児取り違え事件を取り上げた「そして父になる」、ルックバック」同様マンガを原作とする「海街diary」、カンヌ国際映画祭で最高賞「パルムドール」を受賞した「万引き家族」と、世評の高い作品群で繰り返し「喪失と再生」というテーマが描かれてきた。

今回の「ルックバック」でも、原作は、にかほ市出身の藤本タツキ氏が、集英社のウェブサイトに「少年ジャンプ+（プラス）」に2021年7月に発表した長編読み切りである。当時、これほどのクオリティーの作品がいきなり全編無料で公開されたと

近年、アニメや映画の舞台となった土地をファンが訪れる「聖地巡礼」が、「推し活」の一環として地域に経済効果をもたらす例が多くみられる。新海誠監督の「君の名は。」などは、舞台のモデルとなった岐阜県に200億円超の経済効果をもたらしたとの試算もある。その出発点は、ファン一人一人のロコミだ。かくいう私も、職場で同僚に「ルックバック」の原作を薦めまくる、いわゆる「布教」

元の人々が自らの風景をどれだけ誇りに思い、大切にできたかではないだろうか。その意味で、本作品の本県にとつての価値は、にかほ市を中心とした秋田の風景を、是枝監督をはじめとしたプロのスタッフが美しく切り取ってくれたことにあるだろう。完成報告の席で、是枝監督自身が「登場人物と（秋田の）風景とが祝福されている感じを共有していただけ」といふなど思う」と語っていた。

日常の風景を「聖地」に

ある実在の悲劇的な事件が影を落としている。おそらく是枝監督の中で、そこからのように「希望」や「再生」を描くか葛藤があったのではないかと推測

一気に評判になり、私の周りでも「あの作品をもつ読んだか？」というメッセージが飛び交ったのを覚えている。2024年6月にはアニメ映画も公開され、日本アカデミー賞最優秀アニメーション作品賞を獲得したのも記憶に新しい。それほど評判の高い作品を是枝監督が実写化するのだから、本県関係者の期待が一気に高まったのも無理はないだろう。

活動にいそしんだ一人である。ただ、話題作の舞台となつても、ブームが去れば客足が途絶えることも少なくない。一方、例えば「赤毛のアン」の舞台であるカナダのプリンス・エドワード島には、初版が刊行された1908年の翌年にはスウェーデンから観光客が訪れた記録があるといい、今なお世界中から人々が足を運ぶ。その差を分けるのは、作品の人気以上に、地

秋田の風景を身近に感じている観客であれば、にかほの四季を通じた田園風景や白鳥の飛び立つさま、主演の2人が外出する際のさまざまなシーンで、われわれにとつての日常がこれほどまでに詩的に記録されたことに驚くだろう。見慣れた風景の価値に改めて気づくところ、息の長い「聖地」への第一歩だ。多くの本県関係者に見てほしい作品だと切に思い、映画館を後にした。



（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉